後藤和智事務所 OffLine
SNS 叢書・1

なぜ右派は若者に憑依し、サブカルチャー左派は若者を憎悪するのか

後藤和智事務所 OffLine
2023 年 3 月 26 日（仙台コミケ 271）

後藤和智事務所ＯｆｆＬｉｎｅ　ＳＮＳ叢書・１

なぜ右派は若者に憑依し、サブカルチャー左派は若者を憎悪するのか

目次

はじめに（書き下ろし）　4
若い世代から選択肢を奪っているという自覚と反省はあるのか（note 2020.10.04）　5
「安倍晋三的なるもの」を担ったもの（ツイッター 2022.09.27）5
「若者問題」の後ろで差別扇動者がほくそ笑む（サークルブログ 2020.10.24）　6
「自分たちにステレオタイプを押し付けるな」になぜ左派はそんなに反発する？（ツイッター 2022.01.19）　8
なぜ左派は若者の社会運動を軽視するのか（ツイッター 2022.06.23）　9
〈Ｚ世代幻想〉と左派〝オタク〟（サークルブログ 2022.05.26）11
「おたく族の末裔」としての表現規制反対派ムラ――墨東公安委員会「チンドン屋たちの暴走」を批判する（サークルブログ 2022.07.09）　15
世代論はなにを正当化し、なにを疎外するのか（ツイッター 2022.01.04）　20
反フェミニズムを生み出す〝オタク〟的コミュニケーション（ツイッター 2022.01.12）　21
サブカルチャー左派はなぜ若者を憎悪するのか（ツイッター 2022.01.19）　22

書評：山本咲子「「女性は男性より幸福度が高い」「だから女性の支援は後回し」という議論の危うさ」：古市憲寿批判にも使える理論（ツイッター 2022.04.27）　22
絶望は暴力である（ツイッター 2022.06.01）　23
選挙結果と若者幻想（ツイッター 2022.07.11）23
「シルバー民主主義」論の錯誤（ツイッター 2022.07.26）　24
左派〝オタク〟の差別意識（ツイッター 2022.08.14）　25
「暗く盛り上がる」人たち（ツイッター 2022.08.22）　25
「若者＝政敵」論の差別性（ツイッター 2022.10.02）　26
「普通の日本人批判」の特権性（ツイッター 2022.10.22）　27
マーケティング思考の落とし穴（ツイッター 2022.10.24）　27
世代論に弱い左派でいいのか（ツイッター 2022.10.30）　28
若者論の本質とはなにか（ツイッター 2022.10.31）　28
「若者に憑依し、口を奪う右派」を正しく認識せよ（ツイッター 2022.11.03）　30
右派と通底するサブカルチャー左派のコミュニケーション様式（ツイッター 2022.11.13）31
「若者の右傾化」論がもたらしたもの（ツイッター 2022.11.26）32
「オタク主義」と被害者意識（ツイッター 2022.12.04）32
「臣民」「奴隷」って言うな！（ツイッター 2022.12.11）　33
書評：伊藤昌亮「ひろゆき論」：正直、期待外れだった（ツイッター 2023.3.13）33

はじめに（書き下ろし）

今回から「後藤和智事務所ＯｆｆＬｉｎｅ ＳＮＳ叢書」というシリーズを開始します、後藤和智です。まあ「叢書」という名前を付けておりますが、要はいわゆる「ツイッターまとめ」本です。ツイッターがイーロン・マスクという起業家に買収され、急激にサービスが低下し、サービスそのものの安定性が揺らぐ中、やはり何か紙媒体として残しておければと思い、ツイッターやブログ、ｎｏｔｅなどの記事をテーマ別にまとめたものを作成しようと思いつきました。本当は２０２２年10月に開催された「地下道３１５０」合わせで出そうと思ったのですが、ひとえに筆者の怠惰のせいでおよそ半年ほどずれ込んでしまいました。本当に申し訳ない。

さて、第1回のテーマは「左派の若者バッシング」です。最近になって私は一部の左派における「普通の日本人」バッシングや若年層への偏見を批判してきたのですが、その背景を探るという意味でいくつかの連投をこのようにまとめてみました。

私が２０２２年に読んだ本の中で最も印象に残ったのは、『トランスジェンダー問題：議論は正義のために』（ショーン・フェイ：著、高井ゆと里：訳、明石書店、２０２２年）と迷ったのですが、作家の栗本薫が「中島梓」名義で出した『コミュニケーション不全症候群』（ちくま文庫、１９９１年）でした。本書は「オウム真理教の出現を予見していた部分がある」とまで言われる本ですが、オウムというよりも、我が国のサブカルチャー、メディアカルチャーの消費層が持つ思想と行動についての問題点をえぐり出した本として、いまこそ読まれるべきだと思います。本書で指摘された問題は、刊行から30年以上経った現在もアクチュアルです。ただ、本書を日本人論ないし日本社会固有の問題を論じたものとして読むのにも違和感があります。むしろ、インターネット掲示板「２ちゃんねる」を作った西村博之がアメリカで作った「４ｃｈａｎ」が陰謀論やテロリズムの引き金になったことなど、いまやグローバルな問題を引き起こしているサブカルチャーの消費者・消費文化の問題を論じたものとして読まれるべきでしょう。

「オタク」的なコミュニケーションの中核にあるのは「特権意識と被害者意識」であるということは最近になってよく聞かれるようになりましたが、本書で採り上げるサブカルチャー左派は、「若者の右傾化」論や「ヤンキー」論によって「若者」をスケープゴートにすることにより自らのコミュニケーション様式を批判的に捉えることを回避しているように見えてなりません。「若者」や「普通の日本人」連中と俺達は違う、という、それこそ特権意識で繋がることにより被害者意識を増幅させていく、というのは、イデオロギーの問題ではなくコミュニケーションの問題と捉えられるべきものなのです。

本書に収録されたツイートやブログの記事のような内容のことを書くようになってから、サブカルチャー左派界隈から「後藤はどの立場から若者論を批判しているのか」「お前はもう若くない」などということを言われるようになりました。しかし、そのような態度は、彼らが常日頃批判している反フェミニズム論客と同じではないでしょうか。若者論批判という観点でサブカルチャー左派を覗いてみたら、その実態は憎悪する対象が少し違うだけで右派とうり二つ、と思えてな

りません。サブカルチャー左派の若者論という問題から、今一度「オタク」的コミュニケーションの問題を考えていただければ幸いです。

若い世代から選択肢を奪っているという自覚と反省はあるのか（note 2020.10.04）

初出：https://note.com/kazugoto/n/n19b0c0c44f97

「なぜ若者の政権支持率は高いのか」という類の論説で疑問なのは、こういった論説が前提としているのが「若い世代は現在の自民党政権しか知らないから権力に忖度するような考え方を〝自然と〟身に付けるようになってしまっている」というものだ。しかし、我が国の〝言論〟を10年以上見てきている身として、そして『「あいつらは自分たちとは違う」という病』（日本図書センター、２０１３年）のようなものを書くときに過去の言説を参照してきた私としては、そういった表面的な考え方ではただの若者バッシングにしかならないと思っている。

遅くとも１９８０年代のバブル期以降から、「政治」に関する議論は若い世代を取り巻く文化において忌避され（この時代のトップランナーであった糸井重里の現在の振る舞いを見ればわかろうというものだ）、さらに１９９０年代における若者向け保守言説や、それよりも悪影響が大きい、実質的なリバタリアニズムを〝正しいリベラル〟にすり替えるような宮台真司などの言説の悪いところだけを抽出したような「若手論客」たちは、「イデオロギーフリー」を謳いつつ結局攻撃の対象になったのは反権力、反差別的なものばかりだった。そうして権力への反抗が「ダサい」という風潮が作られていったことは、何よりも上の世代の責任ではないのか。

実際私も「中高年を批判してももう無駄だから若い世代を批判している」みたいなことを複数回見たことがあるが、そうしてここまで述べてきたような風潮を作ってきた高年齢層を〝聖域化〟しているのではないか。そして、責任を避けるために若い世代を叩いて鬱憤を晴らしているとしか思えない。そういう文化を放置して、若い世代から選択肢を奪ってきたのではないのか！

そういった言論や文化の歴史的な流れを無視すると、先のように若い世代のみを単純な世代論で問題視することしかできないし、若い世代に呆れて終わり、ということしかできなくなるのである。もういい加減不毛な世代論はやめるべきではないか！

「安倍晋三的なるもの」を担ったもの（ツイッター 2022.09.27）

初出：https://twitter.com/kazugoto/status/1574763614313287680

さて、全く正統性のない安倍晋三氏の「国葬」が挙行されましたが、「安倍晋三的なるもの」の検証については一切の手を緩めてはならないと思います。「安倍晋三的なるもの」の担い手として極めて重要なのですが、しかしほとんど省察されないのが１９９０年代～２０００年代のサブカルチャー、そして２０００年代のロスジェネ論客です。

前者は彼らがサブカルチャー、そしてネットの場でアンチレフト的

な文化を作り、後者は１９７０年代半ば～１９８０年代初頭生まれの「若者」こそが「真なる弱者」であるとして、あらゆる議論を世代間対立に収斂させた。そして２０１２年の第二次安倍晋三政権の誕生も、ロスジェネ・親ロスジェネ論客による「自民党＝若者の味方」的な扇動の存在は極めて重要ではなかったでしょうか。そして彼らは若い世代に憑依しまくり、「自民党こそ若者の味方」というムードを作り上げました。

その背景にはアンチレフト的なカルチャーがありました。そして左派は、そんなものに気付かず、あるいは意図的に無視して「政権を支持しているっぽい若者」を問題視しています。

１９９０・２０００年代サブカルチャーの担い手や、ロスジェネ・親ロスジェネ論客は本当に卑怯だと思います。なぜなら、排外主義的な言説や政治の小さくない文化的なバックボーンを築きつつ、最早「若者」ではなくなった彼らは、左派により若い世代を叩かせる形で逃げ切ったわけですから。そして、最初から同世代を変えることはできない、と決めつけて、寄る年波には勝てぬだの、自分は過度に若い世代に期待することに警鐘を鳴らしているだけだの、老いを否定するななどと言って若い世代ばかり問題視したがる、特に30～50代男性の左派は、彼らと同罪だとはっきり言います。

多くの左派が「若者論」にかまけている間に、何が免罪されているのかということを、「安倍晋三的なるもの」の絶え間ない検証と同時に、問い続けていきたいと思います。

「若者問題」の後ろで差別扇動者がほくそ笑む（サークルブログ 2020.10.24）

初出：https://kazugoto.hatenablog.com/entry/2020/10/24/212613

本日昼にバズったこの日経新聞の記事ですが。

「SNSで揺らぐ平和意識　戦争容認、簡単に「いいね」https://www.nikkei.com/article/DGXMZO65424360U0A021C2CE0000/

私はこの記事に対してこのように反応した。

だからこの手の問題を「最近の若者の問題」としてはいけないんだって。戦争犯罪者や戦争に「いいところもあった」というのは右派論壇の常套句で、ネットにあるのはそういったメディアの延長に過ぎない。(https://twitter.com/kazugoto/status/1319886371700371456)

この手の「ネットで安直に右派言説に共感してしまう若者」という問題設定はたびたび新聞記事になる（今回は日経新聞だったが、体感としては朝日新聞が多い）。今月もすでにこの手の記事がバズって、そしてそれに対して私は批判していた。冒頭で採り上げた日経の記事にも、ここで採り上げた朝日の記事のような認識が出てきている。

入試や就職活動でコミュニケーション力や「多様性」といった価値観を求められる今の学生世代。成蹊大の野口雅弘教授（政治思想）は『最近の学生は人への優しさや寛容を重視するあまり、権力者の不正や戦争などにも理解を示そうとするのでは』と分析する。

東京外国語大の小野寺拓也講師（ドイツ現代史）は「皆で仲良くし、和を乱すべきではないと学んできた最近の大学生は『批判は良くない』と嫌う風潮がある」という。その上で「（安易に）白黒をつけるのではなく、考え続けることが大切。本音で議論できる場で、率直な意見を言い合う経験が必要だと伝えたい」と訴えている。

この手の安直な世代論は、同様の記事で頻繁に出てくるものだ。すなわち、いまの若い世代は、コミュニケーション能力とかが重視される世の中で「批判すること」「他人を傷つけること」を嫌い、安直にああいった「いい話」に乗ってしまうというものである。そういえば同様のことを書いたとされる『やさしさの精神病理』（大平健、岩波新書）が１９９５年だったか。

まずそういった議論は、世代論、若者論として少なくとも平成以降ほぼ一貫して語られてきたものであり、いまの若い世代特有の病理として採り上げることはさすがに無理があるというものをまずは理解した方がいい。

第二に、そもそもああいった「戦争には「いい側面」もあった」などという物言いは、右派論壇の常套句であり、いわば「紙ペラ1枚で〝反論〟してみせる」という意味では右派論壇が一貫して行ってきた手法であって、「ネット」「ＳＮＳ」特有の問題ではないということである。この手法については、倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー』（青土社、２０１８年）を参照されたい。

右派扇動ないし排外主義の担い手としての「若者」という枠組みを用いる手法は、香山リカ『ぷちナショナリズム症候群』（中公新書ラクレ、２００２年）が象徴するように、２０００年代においてよく見られた手法である。しかしそれらの議論は単純な世代論を超えるものではない。しかし単純な世代論を超えるものではない故に人口に膾炙しやすかったのも事実である。これによって左派は「けしからん若者」の一類型として「右傾化する若者」という像にすがり（それ故、荷宮和子『バリバリのハト派』（晶文社、２００４年）をはじめとする諸著作などのようにただの若者嫌いを表明しているだけのものが「リベラル」として出版されたり、受け入れられたりしてしまう）、また「若者の味方（ないし見方）」をとると僭称する論客は左派がそういった無根拠な決めつけを行っていると攻撃したり、あるいは「左派」を「既得権益者」として攻撃する口実にしてしまっている。

そういった構図で得をするのは、間違いなくいまや政権の中心を構成するまでになっている正論文化人的なものであり、あるいは差別主義者、歴史修正主義者である。

このことは、この記事に登場する小野寺拓也氏の次のような「補足」でむしろ懸念がさらに深まってしまう。

←後藤さんのご意見、基本的に同感です。若者の問題として「の

み」とらえるのではなく、若者にも端的に現れている社会全体の現象（たとえば「批判は良くない」という風潮）として考えていきたいというのが私の意図ですが、記事だけではきちんと伝わっているとは思えないので、補足させてください。（現在は削除）

あくまでも記事中で採り上げられている一コメンテーターである小野寺氏に言っても仕方のないことではあるが、じゃあそれこそなんで「若者」を採り上げたんすか、ということである。「若者」は「問題化」しやすく、そして話も広がりやすい、という以上のものが、果たしてあるのだろうか。「若者の心」を問題化することによって隠される、批判を免れるものの存在について、もう一度考えてほしいものである。「若者の心」を問題の枠組みとして採用するのを意図的に排除するくらいでないと、不毛な議論は繰り返される。

「自分たちにステレオタイプを押し付けるな」になぜ左派はそんなに反発する？（ツイッター 2022.01.19）

初出：https://twitter.com/kazugoto/status/1483753304073334786

ネトフリ版新聞記者を一緒に観てる娘氏16歳。「政治ってどうせ全部上が決めるんでしょ？上が決めたって平和ならよくない？」というのが「若者の声」として描かれていることについて。「これって年配の人たちの考えだよね。勝手に若者像作って自分たちが延命させたものの責任を私らになすりつけないで」と一蹴。

——鴻巣麻里香（https://twitter.com/marikakonosu/status/1483398511416995841 ほか）

この「娘」氏の意見に反発する左派（と見られる人）が多くて幻滅した。少なくとも「娘」氏は「ステレオタイプで自分たちを決めつけるな」以上のことを言っていないと思うのだが、そんなにお前らはステレオタイプで若い世代を「政敵」にしたいのかと思った。「娘もステレオタイプで語っている」という表現規制反対派ムラさながらのオウム返しとかも見られたし。この「娘」氏の発言に噛みついている多くの左派も所詮は相手が若い女性で、かつ発言者も女性だからクソリプ魂がうずいているんだろう。俺だってこういう抽象化に反発して若者批判を行い、そして反差別に向かったんだよ。こういう抽象化への批判を莫迦にするな！

改めて、この良くも悪くもただの批判的感想に過ぎない「娘氏」の発言を躍起になって否定したがる人、特に左派の多さを見るにつけ、改めて反若者論という私の原点を大事にして反差別や社会的問題に取り組んでいきたいと思った。

私だってよく言われたんだ。「お前（ｏｒ こいつ）みたいな〝意識の高い〟若者というのは少数派で、現実の「若者」は遥かに愚かだ」「お前（ｏｒ こいつ）は東北大のエリートだから〝現実の若者〟を

見ていない」とか。そうやってステレオタイプな若者表象に対する批判を否定、もしくは嘲笑されてきた。「データが示しているから」みたいなのも結局のところ「ステレオタイプに基づいて若い世代を見下したい」ということの正当化でしかないんですよ。そんなに「若者＝右傾化・保守化＝政敵」と見なして若い世代を排除したいか。左派内のホモソーシャルを守りたいか。

こういうZ世代幻想めいたものもあまり信用していない。そうだったらいいなとは思うけど、この先2度3度と選挙にコミットする過程でだんだん無力感に蝕まれていく可能性も全然あるので、大人がそれをアテにしていてはいけないんじゃないかと。

——Lhasa（https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1483565169309413376）

じゃあ本当に彼らが選挙権を得たら日本は変わってくんでしょうね？ と考えるとそんな単純な訳ないじゃん、て思うし。「政治は上が決めるんじゃなくて自分ら国民が決めるんだ」と自分の頭で考えた結果より保守的で排外的になってく現未成年だって沢山出てくるんじゃないか。

——同（https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1483566513940414466）

変化は訪れども、良く変わるとは限らない。〝自分の意思で〟ファシズム国家を選ぶ若者だって居るかもよ。

——同（https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1483566852001333248）

また、こういう風に、ただの「娘氏」の感想を採り上げただけのものを「Z世代幻想めいたもの」として非難するのも違和感がある。私も投票率が上がれば左派が勝つというのは幻想に過ぎないと思っているが、ただ、ただの批判的感想を採り上げたに過ぎないものを殊更採り上げて、後のツイートのように悲観的に述べてしまうのも結局のところ若い世代への「絶望」を言い訳にして若者を叩きたいだけではないのか、そして若い世代の批判的感想を「なかったもの」にしたいだけではないか、と疑ってしまう。冒頭で採り上げたような、この程度の「感想」を、表現無罪論者やアンチレフト連中とともに躍起になって否定したがる左派の姿こそが、若者バッシングで繋がる左派のホモソーシャルと言えようか。

なぜ左派は若者の社会運動を軽視するのか（ツイッター 2022.06.23）

初出：https://twitter.com/kazugoto/status/1539982899692580864

ていうか若者が本当に将来世代のために世の中を変えたいなら、グレタ・トゥーンベリのように主体的に世界を変えているはずだからね。ただ口を開けてピーチクパーチク「ワカモノガナイガシロニサレテルー」とわめくだけの雛鳥には何も与える必要はないですよ。

——北守（藤崎剛人）https://twitter.com/hokusyu82/status/1537788006664671232

このツイート自体は正しいのだが、現実には日本でも環境運動やジェンダー平等、反戦平和などでデモやネット上での行動をしている若い世代もいる。しかしそういう行動をする若い世代に対しては直上の世代を中心とするネット文化のマジョリティによってバッシングや嘲笑の的にされているし（例えば、若い世代が反戦を訴える新聞記事のツイートの引用には「テロ国家の見方」「莫迦だから左翼に騙される」というものが多数見られる）、さらには左派にも「若者＝右傾化」という図式に凝り固まって若い世代の運動を無視する人間もいる。例えば、２０２１参院選の１週間後に、大手マスコミに報じられる程度には規模の大きい、若い世代による環境保護運動が報じられたのに「世界では若者が環境運動をしているのに自民党を支持する日本の若者はだんまり」的なことを言った白石草が挙げられる。

だから左派も「若者＝右傾化＝自分たちの政敵」みたいな図式で若い世代を見ないでほしいと思うし、社会運動を行う若い世代を孤立させてはならないと思う。

若い世代に対して「お前たちは政権を支持しているんだから従え、苦しめ」という態度をとる左派は、この考え方に立脚していると言えるんだよね。本来は批判されるべき民主主義に対する勘違いを若者バッシングのために利用していてむしろ自民公明維新の支持者よりも悪質と言えるかもしれない。

日本でもグレタ・トゥーンベリに呼応してデモを行った若者はいた。しかし残念ながら他の先進国のように万単位の運動にはなっていない。ほとんどの日本の若者は、投票行動からしても、気候変動問題なんて道楽に過ぎずエネルギーをたくさん消費して経済成長しようっていう大人に賛成してるんじゃないの？

——同（https://twitter.com/hokusyu82/status/1540219916301004800）

で。冒頭のような懸念を示したとき、採り上げた人による別のツイートが流れてきて、そのツリーの下にこんなツイートが……。２０１９参院選の後もそうだったけど、そうまでして若い世代を貶めたいのか？と思ったんだよね。既に指摘されているけど、若い世代が環境とか反戦とかジェンダー平等で声を上げると、特に直上の世代からネット上とか路上でバッシングを受けるわけ。それに萎縮して行動しない若い世代も少なくはないだろう。「若者の政権支持」みたいなものもその要素が強いのではないか。

こういう状況にあって、行動する若い世代に連帯したり、あるいはそれを疎外するものを批判するわけでもなく、こういう風に行動しない若い世代をけなす、というのは大問題だと思うし、それは私の同世代や直上の世代の、特に〝オタク〟文化に近い男性によく見られる。要するに、たかが選挙における政権党への投票割合（「支持率」でも「得票数」でもない！）とその周辺を見て、若い世代を勝手に「政敵」みたいなものとして若い世代全体を貶めるという。別に若い世代は「若者」という組織に属しているわけでもないし高齢者だって然り。

ああいう風に若い世代を貶めるのは優れてマーケティングアナリシス的なことである。要するに断片的なデータや事例を用いて若い世代全体の傾向を断定し、「彼ら（＝若者）」と「私たち」の間に過度に線引きをしてしまう。それが差別でなくてなんなのだ。私と同世代や直上の、特に〝オタク〟文化に近い男性左派において「俺に莫迦にされたくなければ左派政党に投票しろ、ＯＫ？」みたいな態度が広がっているのは恥ずべきことだ。社会運動や発言を行う若い世代にとっては、彼らの行動は冷笑右派と区別がつかないだろう。

白石草について：

気候変動や学費をめぐり、大規模なデモをする海外の若者たち。一方、日本でデモに参加する若者はわずかで、生活に苦しい若者が与党を支持し、グレタさんを叩く。不思議。（https://twitter.com/hamemen/status/1457088729789526021）

そんな比較をするよりもむしろ日本で環境運動をやっている若者（実際報道されている）を支援するべきではないのか。世代論は何も生まない。あといい加減「グレタさん」はやめてほしい。（https://twitter.com/kazugoto/status/1457157722315509771）

〈Z世代幻想〉と左派〝オタク〟（サークルブログ 2022.05.26）

初出：https://kazugoto.hatenablog.com/entry/2022/05/26/225724

「若い世代は差別意識が低くなっている」という言説（この言説自体の正当性の検証は措くとして）に反駁するために、近年国内外で起こっている若年者によるヘイトクライムを採り上げて、冒頭の言説が「大嘘」などと言うのはまさしく若者バッシングの典型的手法なんだけどな。（https://twitter.com/kazugoto/status/1528731449842888704）

某Ｌｈａｓａ氏はなぜ「若い世代（または〈Z世代〉）は差別意識が低くなっている」という言説と、それを「大嘘」だと言うことにかくも固執するのか。否定することでなにを守りたいのか。第一「若い世代は差別意識が低くなっている」などという言説、そんなに大々的に肯定されているか？（https://twitter.com/kazugoto/status/1528731451902283776）

結局のところ、ある種の〝オタク〟仕草（「一般人」と「自分」を過剰に線引きする行為）として「若者」や「Z世代」を貶めることで優越感と被害者意識を自分の中で増幅させているようにしか見えない。それこそが憎悪であり、差別意識なんだが。（https://twitter.com/kazugoto/status/1528731453785505793）

というツイートをしたところ、このような返答があった。

世代論によって「我々とは違う、彼らは希望だ！」と自分達から切り離し若者に過大なものを背負わせ未来を託そうとするのは、大人の無責任だと感じるからです。これは「女性は

男より賢い、母は強い」みたいな称える言葉を男が言う無責任さと同質のものだと考えてます。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1528993725103210496)

俺が、若者を差別し憎悪してるように見えているならば、ここで「いえ、違いますよ」と俺が言ったところで、それはあまり意味の無い事だろうと思います。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1528994612676702210)

確かに「そう見えている」人に「違います」と言っても納得なんてしては貰えないでしょう。そういうのは、俺自身がそ見られ方を変えられるようにやってくしかない。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1528995032786604032)

俺の見立てが全くの見当外れで、若い世代は陰謀論や排外主義に絡め取られず多様性に寛容な子達が殆どで、世界は良くなっていく予感しか無いのであればその方が良いと思いますし、俺はもっと楽観的に生きて年老いて心穏やかに死んでいけるので助かります。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1528998775850557440)

そもそも私が冒頭のようなツイートをしたのは、冒頭で採り上げた人物が、次のようなツイートを（私が見る限りでは）思い出したように行っていたことにある。

若い世代は差別意識が低いなんて大嘘ですよ。バッファローの犯人もカイル・リッテンハウスも18歳で犯行。ウトロ地区を放火したのは22歳。若者に夢を見る前に大人がすべき事をしろと思う。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1527430800529969152)

そもそも、《若い世代は差別意識が低い》という言説の正当性を措くとしても、数例の「衝撃的」な事例で全体的な傾向を否定するのは若者バッシングの常套手段であり、しかも「大嘘」という言葉を使うことによって強く否定している。

それでは彼が一体何を懸念しているのかというと、《世代論によって「我々とは違う、彼らは希望だ！」と自分達から切り離し若者に過大なものを背負わせ未来を託そうとする》ことなのだという。例えば、ソーシャルワーカーの鴻巣麻里香が娘の発言として、とある映画における若者像に「自分たちをステレオタイプに描くな」という（それこそ若いときの私もよく抱いていた）発言を紹介したことを、「Z世代幻想」と表現していた（前項参照）。

さて冒頭で、私は「いまの若者は差別意識が低い」という言説を《そんなに大々的に肯定されているか?》と言った。実際問題、Ｌｈａｓａの言う《世代論によって「我々とは違う、彼らは希望だ！」と自分達から切り離し若者に過大なものを背負わせ未来を託そう》としているのは、左派よりも右派ではないか。若い世代の口を借りたり憑依したりして「立憲野党や左派はいまの若者に支持されていない！」と述べる言説を、マスコミからネットに至るまで何度と見てきた。若い世代が左派的だとか差別意識が低いというのは、ＳＥＡＬＤｓの全盛期

ならいざ知らず（いや、ＳＥＡＬＤｓの全盛期でも）極めて少数派ではないか。

若者に憑依したり、若者の口を借りたがる右派論客はたくさんいるし、またＡＢＥＭＡニュースなどのコメンテーターのラインナップを見るとおり、メディアに登場する若い世代はもっぱら自民・維新的な考え方を持つ人間が主流としか言い様がない。表立って社会批判、政権批判を言えるようなコメンテーターは、私の世代周辺以下だと、せいぜい荻上チキと安田菜津紀くらいではなかろうか。少なくともメディアに登場する表象においては、「若者＝アンチレフト、左派不支持」という図式が圧勝している。若い世代は差別意識が低い、という言説は、むしろ反差別運動を行っている若い層のナラティブではないかと思われる。

《世代論によって「我々とは違う、彼らは希望だ！」と自分達から切り離し若者に過大なものを背負わせ未来を託そう》という動きに反対したければ、若い世代に憑依する右派をこそ批判せよ、というのは何も単なるｗｈａｔａｂｏｕｔｉｓｍで言っているのではない。むしろ、ロスジェネ・親ロスジェネ論客によって「左派は若者の敵だ！」的な言説が煽られ、その流れを汲む論客によって「若者は左派を支持していない」という雰囲気が作られることで、若い世代から左派を支持するという選択肢が奪われているという現状があるし、何より右派こそが「戦後民主主義」や「左派支配」の脱却という夢（願望とも言う）を若い世代に託している。だから安倍政権を批判的に総括した記事を書いた私に対して呉座勇一が「若年寄化」していると評したり（https://twitter.com/kazugoto/status/1373663086465314819）、また大阪〝都構想〟の住民投票において20代の支持率が30代・40代より低かったことに対して激怒してしまったりするのである。

少なくともメディアに登場する表象においてあまり支持されていない「若者は差別意識が低い」という言説をかくも熱心に否定したがる心性は何か。それは《世代論によって「我々とは違う、彼らは希望だ！」と自分達から切り離し若者に過大なものを背負わせ未来を託そう》とする動きに対する批判ではなく、むしろ若い世代に対する偏見の正当化ではないか。

例えばＬｈａｓａはこう言う。

> 自分も含め90年代以前の子供が娯楽の中心だったテレビや雑誌の中にある世界に影響され価値観を形成されてったように、生まれた時からネットがあって当たり前の世代にとってはネット上にあるヘイトを含めた〝言論の自由〟に当たり前に触れて育っていくという事でもある。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1529208814410469377)
>
> ネットを通じて実態がどうであれ他人の人生が可視化されるという事は劣等感と憎悪ばかりを育んでいく可能性だって大いにある。(https://twitter.com/AtTheBlackLodge/status/1529209020623380480)

なるほどこれも確かに事実の一端ではある。しかし、若い世代がネットによってどんどん憎悪や劣等感を育んでいく「可能性」を過度に強調しすぎるきらいがあるのではないか。それは若い世代が過剰に持ち